

# 文学・科学・テキスト

## 反-文学あるいは文学の擬態

新谷 淳一

### I. 還元不可能性の学

文学の“学”は、作家や作品の還元不可能な固有性を想定しつつ反復される、慣習的身振りのうちでその身分を立てている。固有性に就く学という矛盾は重大である。文学研究には、ほとんど解決不能なこの困難の矛先が、たえずさし向けられている。

科学がいかにして、特定の作家 [*un auteur*] について語りうるというのか。文学の科学によって文学作品は、著者の名を持つにも係わらず、それを持たない神話に類するものとならざるをえない<sup>1</sup>。

もちろん文学研究は、ただちに“科学”にまで至る必要はないとしても、“学”である限り何らかの一般性を指向し、その度合いに応じて、出発点の固有性をいくばくか減衰させるべきものである。『架空の伝記』という示唆的なタイトルを与えられた短編集の序文で、マルセル・シュオブはこう述べている。

歴史学は、個人に関して私たちを不確実のなかに置く。それは、個人が一般的な動きへと接合されたポイントだけを私たちに提示する。[...]。芸術は、一般的な観念と正反対のもので、個人的なものだけを描き、単独のものだけを欲する。それは、分類する [*classe*] のではなく、分類を破棄する [*déclasse*] 。

少なくともある時期以後の芸術は、「偉人の生だけが私たちの興味を引きうる」という伝統的信念を捨て、「見知らぬ人間の肖像」を、無名の個別性のうちに提示することに自足しうるものとなった<sup>2</sup>。だが、たとえ文学の存在理

<sup>1</sup> Roland Barthes, « Critique et vérité », in *Œuvres complètes*, Seuil, 2002, t. II, p. 789. バルトについては以後、タイトルのあとに巻数と頁のみを記す。

<sup>2</sup> Marcel Schwob, « Vies imaginaires » (1896), in *Œuvres*, Phébus, 2002, p. 509 et p. 515. この序文をジュール・ルナールは、「すべての芸術家が暗唱すべき」ものと讃えた (Jules Renard, *Correspondance*, Bernouard, 1930, cité dans *ibid.*, p. 508)。それ以上に讃えられるべきは、あとに続く作品群の完成度の高さだが。

由が“分類を破棄する”ことにあるのだとしても、その“学”は、固有性が一般性へ“接合されるポイント”を求める意志を、持たなくてはならない。

文学研究の制度化の立役者ギュスターヴ・ランソンは、個別性と一般性の間に、たとえば次のように反応している。

個人の天分のうちで最も美しく最も偉大なのは、それを孤立させる特異性ではなく、特異性それ自体において、時代や集団の集合的な生を、自らのうちで凝縮し象徴すること、つまりは代表することである<sup>3</sup>。

イェーナ・ロマン派の象徴の概念を連想させなくもないこの定式は、修辞学に代わる文学理解の枠組みたる文学史の、弱点を繕う口上なのだろうか。いずれにせよ、19世紀から20世紀初頭までの文学と文学史の流れにおいて、個と集団の関係が、厄介だが避けがたい問いであり続けたことは間違いない<sup>4</sup>。ランソンが与える、「個人性を引きだし、それを、単独で還元不可能で解体不可能な様相において表現する」こと、および、「天分を持つ人間を、環境の産物かつ集団の代表として提示する」こと、これら「対立するふたつの方向に同時に進むべき」との指針があっても、実際にはどうやって“同時に”進めばよいのか。「傑作のうちの集団的なものと個人的なものを配合する [doser]」といったも、配合の平衡点を求めること自体に意味があるわけでもなからう<sup>5</sup>。

結局のところ、ランソンが制度的に確立した文学研究は、個と集団の係わりについての自身の理念をやや裏切るように、「文学的な知は、その対象も手段も厳密な意味で科学的なものではない<sup>6</sup>」という良識的判断のもと、「科学 [science] は一般的なものに関してしかない」という定式はうっちゃっておき、「知識 [connaissance] は個別的なものに関してしかない」という定式

<sup>3</sup> Gustave Lanson, « La méthode de l'histoire littéraire » (1910), in *Essais de méthode, de critique et d'histoire littéraire*, 1965, p. 36. この一文に凝縮される構図は、文学史と社会学の関係を論じる別のテキストでは、個別性に係わりと見える文学研究が、一歩踏み込めば社会的な一般性に帰着するというかたちで、行論それ自体に組みこまれる (voir « L'histoire littéraire et la sociologie » (1904), in *ibid.* )。

<sup>4</sup> この関係について、次の拙稿で論じた：「文学の終焉：文学というジャンル、その内と外」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）、第36号、2008年3月所収。この拙稿は実のところ、先に書き始められた本稿の“派生物”であり、内容的に関連が深い。

<sup>5</sup> G. Lanson, « La méthode de l'histoire littéraire », p. 36 et p. 37.

<sup>6</sup> Idem, *Histoire de la littérature française*, Hachette, 1951, p. viii.

に従うことで成立する<sup>7</sup>。作家という個を巡る<sup>ホシジテ</sup>具体的／<sup>イブ</sup>実証的な情報を集積し、必要に応じ年代記的に関連づけるというランソンの仕事<sup>イブ</sup>が先鞭をつけたのは、“文学の科学”ではなく、“分業”—— および分業が前提とする“共同体”—— の論理と倫理に副う、文学研究の“科学的体制”だった<sup>8</sup>。

ランソンが自らの「真の師」のひとりとして名指すサント＝ブーヴは<sup>9</sup>、作品の背後に控える“人”に執着した。作品の向こうに、作家の「最も彼自身らしい」像を立てるべく<sup>10</sup>、サント＝ブーヴはあとう限りの伝記的細部を収集する。この地道な作業には、作家の精神的肖像を描くことに加え、ある希望が付き従う。この作業の果てに、「権利上、天分それ自体に帰着するところのもの」が、洗いだされた砂金のように、開示されるというのである<sup>11</sup>。

サント＝ブーヴ自身が注記するとおり、作家という“個”の注視それ自体が、新しい関心の現れであった<sup>12</sup>。「モラリストとしての素晴らしい直感」を発揮して「生の感覚」を掴みとるとランソンが評した彼の批評的アプローチは<sup>13</sup>、総体としてモラリスト的とされるフランス文学の伝統のうちで、新たな局面をさし示す。ただし、反-修辞学的な体制における批評の道を、個に就くことによって開いたサント＝ブーヴは、優れた作品の起点に優れた“人”がいるという修辞学的常識を保持した。

サント＝ブーヴを師と仰いだランソンではあっても、第三共和政の申し子

<sup>7</sup> Idem, « L'histoire littéraire et la sociologie », p. 64.

<sup>8</sup> Voir idem, « La méthode de l'histoire littéraire », p. 52-53. 「[...] 批評は分割する。文学史は、それに精神を吹き込む科学と同様に集結させる」 (*ibid.*, p. 56)。科学的教育は、「他の人間の苦勞と創意を考慮し、その努力の跡を継ぎ、その活動に自分の活動をうまく合わせる」ことを弁えた人間を育てる (idem, *L'université et la société moderne*, A. Colin, 1902, p. viii)。

<sup>9</sup> Voir *ibid.*, p. 42.

<sup>10</sup> Sainte-Beuve, « Corneille » (1829), in *Panorama de la littérature française de Marguerite de Navarre aux frères Goncourt : Portraits et causeries*, Livre de poche, 2004, p. 406. 「批評と文学史に関しては、偉人についての良くできた伝記ほどに、息抜きになり、楽しませると同時に、あらゆる種類の教えに富む読み物はないと思われる」 (*ibid.*, p. 403)。

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 407.

<sup>12</sup> 「フランスでもこうした類の研究 [=作家の内面に迫ろうとする研究] が、評価され求められ始めている [...]。当時 [=17世紀] の文学や詩は、ほとんど個人的ではなかった [...]。なぜかは分からぬが、伝記作者たちは、作家の物語はその書き物のうちにまるごと封じこめられていると考えたようで、彼らの表面的な批評は、詩人の奥の人間にまで至ることはなかった」 (*ibid.*, p. 404)。

<sup>13</sup> G. Lanson, *Hommes et livres : études morales et littéraires*, Paris : Lecène, Oudin, 1895, p. vii et p. xi. リプリント: *Méthodes de l'histoire littéraire ; Hommes et livres : études morales et littéraires*, Slatkine Reprints, 1979.

たる彼にとり修辞学は大きな敵であり、“分業による科学”の眼目は、修辭学的世界からの脱却にあった。文学研究の基本単位たる作家の、善良さや人づきあいといった事項をもはや重視しないランソンだが、個を巡る情報収集に付随する件の論理、還元不可能な“天分”の背理法的な存在証明は、師と同様に想定する<sup>14</sup>。この権利上の証明、あらゆる還元の操作をぎりぎりの地点で正当化するかに見えるこの想定は、文学的実質を欠く空虚な論理にすぎないとしても。

文学史の構築より、批評の活動への意識を強く持っていたアルベール・チボーデは、直近の先達ランソンよりサント＝ブーヴとブリュンティエールを重視し、とくに後者のジャンル論的な発想を継承した。自身にさし向けられた、批評家には「単独のものへの留意」が要請されるとの批判に対しチボーデは、「文芸共和国のある種の社会的感覚」を喚起することで反駁する<sup>15</sup>。「純粹批評」なるものへの願いを表明する文脈で彼は、「存在」や「作品」ではなく「本質」に係わる純粹批評を構成する、三項のひとつたる天分についてこう記す。

天分は、個人の最も高次の形姿、個人的なものの最高次元であるが、しかしながら、天分の秘密は、個人性を破裂せしめ、〈イデー〉としてあり、独創[invention]の向こうに創出の流れ[courant d'invention]を示すことにある<sup>16</sup>。

天分は、還元不可能な残滓ではなく、個と個を越える次元が合流する場とされる。この想定に沿って求められるのは、ランソン流の実証的な事実の蓄積ではなく、より抽象的なフォルムの探求である。個と一般性の“接するポイント”を、個の内側や周囲にではなく、個を超越する次元に求めるこの道は、文字通りの“文学の科学”へ向かう。

---

<sup>14</sup> 「決定づけの作業 [déterminations]、によって私たちが到達する近似的姿 [approximation] には、ただ天分が抜け落ちている」(« La méthode de l'histoire littéraire », p. 41)。「この決定不能で説明されえない残滓のうちに、まさしく作品の高次の独創性がある」(*Histoire de la littérature française*, p. vii note 1)。

<sup>15</sup> Albert Thibaudet, « Attention à l'unique », in *Réflexions sur la littérature*, Gallimard, "Quarto", 2007, p. 1600. 批判はガブリエル・マルセルによるもの。ここでのチボーデに関する議論は次に多くを負う：Gérard Genette, « Raisons de la critique pure », in *Figures II*, Seuil, "Points", 1979. 次節で見るように、ジュネットがチボーデのこうした側面に関心を抱くことには必然性がある。

<sup>16</sup> A. Thibaudet, *Physiologie de la critique* (1930), Nizet, 1962, p. 121. 他の二項は「ジャンル」と大文字の「〈書物〉」である。

## II. 文学の科学

Littérature と science は、リシュレがその辞書（1680）で、science des belles-lettres として littérature を定義したときには必ずしも反撥し合う語ではなかったが<sup>17</sup>、1848年にルナンが『科学の未来』を執筆した時点では、ルナン自身は大胆にも融合の可能性を示したふたつの領分の併置は、多くの軋轢を孕んだ。さらに時代をくだり、文学と科学は、ジュネットやある時期のバルトにおいて、文学の科学としての対象性を明確にし、手を携えて進むべきものとなる。

ジュネットは、研究者としての姿勢を明示した「詩学の再興」で、「科学は一般的なものに関してしかない」という定理を、「《事実》を崇め法則に疎い私たちの実証主義的伝統は随分まえに忘れたようだ」と嘆き、「様々な言説の可能態 [les possibles du discours] の体系的探索」の深化を予見した<sup>18</sup>。以後の実績を見れば、ジュネットは文学の科学を最も大掛かりに実践したフランス人研究者と言える。一方のバルトも、新批評のマニフェスト的な『批評と真実』に「文学の科学」という節を立て、内容そのものではなく、「内容の諸条件、つまりは諸形式の科学」を提唱した。ただしバルトは、「作品の意味の複数性そのもの」を論じる「一般的な言説」としての「文学の科学」とは別に、「作品に特定の意味を与える意図を自らのリスクにおいて公然と引き受ける言説」としての「文学批評」をも想定する<sup>19</sup>。バルトの重心は徐々に科学から遠ざかり、晩年の『開講講義』では科学と文学の対立を言いたてるに至る。

科学と文学のふたつの領域を、徐々に多くのモデルや方法の点での関係が関連づけ、しばしば境界を消し去っているのに応じ、両者を対立させることに異議を申したてるのが現在の流儀である。いつの日かこの対立は、歴史上の神話となるかもしれない。しかし、ここで私たちが採用している観点、言語の観点からすれば、この対立は正当である。[...]。科学の言説、ある種の科学の言説によれば、知は発話内容である。エクリチュールにおいては、それは発話行為である。[...]。発話行為の方は、主体の位置とエネルギー、さらには主体の欠

<sup>17</sup> ただし、1666年に設立された王立科学アカデミー [Académie royale des sciences] の名称と内実が示すように、scienceの語義の専門化は始まってはいた。

<sup>18</sup> G. Genette, « Le renouveau de la poétique », *Le Monde*, le 29 mars 1969, supplément.

<sup>19</sup> R. Barthes, « Critique et vérité » (1966), t. II, p. 788 et p. 787.

如（主体の不在ではない）を曝しつつ、言語のうちの現実的なものそれ自体を指向する<sup>20</sup>。

この対立から帰結するのは、批評家もまた「文学の一部をなす<sup>21</sup>」という、それ自体は以前から示唆されていた事態である。逆に、こうした意味での批評から距離をとるジュネットは、研究上の信念を、ある種の感慨を呼ぶ言葉遣いでこう表明している。

自らを、その本質からして、いずれ通用しなくなり [caduc]、失墜を免れないと知ることが、科学的な努力と呼びうるものの特徴のひとつである。これは確かに、まったく否定的な特徴であり、何らかの死後の栄光をたえず期待する《文学的》精神にとっては、楽しくない考え方であろう。だが、批評家なら二次的な作品を夢見ることができるとしても、詩学研究者 [poéticien] はといえば、あらかじめ作品を奪われた労働者 [ouvrier d'avance dés-œuvré] として、東の間のうちに、あるいはむしろ、東の間のもののために仕事をするを棄えている<sup>22</sup>。

“二次的な作品<sup>23</sup>”を次々となしたバルトは、“死後の栄光”を得て、研究対象となり果せた。個別性の学たる文学研究には、教科書的に読まれるべき、明確なテキストがないが、バルトは、テキストのみならず文学のテキストとなりうるものも多く残した。ジュネット自身の仕事は、本人の意向通りテキストとして読み継がれるべきものではなくとも、テキストとして優れたものを多く含むが、その成果が実際に生かされている様子はさほど見えない。

ジュネットによる“科学的な努力”と“文学的精神”の対比は、前者にある種の民主的・平等的な価値を、後者には独創性と裏腹の利己性を見たランソンにおける科学と文学の対比と、概ね整合している。

<sup>20</sup> Idem, *Leçon* (1978), t. V, p. 434-435. 「科学から文学へ」（1967）では、タイトルに見られる二項の非対称性よりも、構造主義を仲立ちとして二項を媒介する意思が感じられる：「構造主義の伸長の当然の帰結として、構造主義は必ずや、文学へと、もはや分析の《対象》ではなくエクリチュールの活動としての文学へと合流し、論理学に発する、作品を対象言語と見做し科学をメタ言語と見做す区分を、[...] 廃することだろう」（« De la science à la littérature », t. II, p. 1266-1267）。1269頁の構造主義への言及も見よ。

<sup>21</sup> Idem, *Sur Racine* (1963), t. II, p. 194.

<sup>22</sup> G. Genette, *Figures III, Sequil*, 1972, p. 269. 「他の仕事によって「打ち破られ」、時代遅れとなることを自ら欲する」というマックス・ウェーバーの学問観を連想させる（『職業としての学問』、岩波文庫、1980年、30頁）。

<sup>23</sup> 作品の周囲に疑似的な作品を生む“批評”活動に批判的な立場をとりつつ、論点を明快に整理しているものとして：阿部良雄、『西欧との対話』、河出書房新社、1972年、第10章、とくに176-179頁。

文学的教育は、多くの落伍者を出しながら、獨創的かつ利己的な空想で世間を驚かす少数の優れた個人を生みだすのに優れている<sup>24</sup>。

文脈としては教育と研究の違いがあり、ランソンに比ベジュネットの筆致は控えめだが、中途半端な文学性を遠ざけるべきと見る点は共通する。

ランソンの「現代の真の人文学」は、修辞学的≒文学的世界像の残滓が、科学的な方法によって一掃された空間として構想された。一方、科学性を指向するジュネットのマニフェストが「詩学の再興 [renouveau]」と題されているのは、この新しい方法が、かつて文学世界を律していた詩学の、かたちを変えての復活と捉えられているからに他ならない。

ジャンルの理論、あるいはより一般的に言説の理論は、誰もが知るように、詩学あるいは修辞学の名のもと古代にまで遡るもので、アリストテレスからラ・アルプまで、ロマン主義の到来以前は西洋の文学思想において維持されていた<sup>25</sup>。

サント＝ブーヴが開いた、個に就く新局面がさらに展開されて、やがて、テクストの偶有性と批評家の個の接触から生まれる批評、バルトをひとつの頂点とする、“二次的な作品”の系譜が浮上する。ジュネットが“再興”の語で示唆する、時間を隔てた連続性は、個に依拠するこの系譜と対照的に、フォーラムの一般性を重視する。ランソンが個別性と一般性の問いに直面したのは、修辞学の規範性≒一般性に添って文学を思考することが不可能となり、時代の要請からもこの規範性を自らに禁じざるをえなかったからだが、ジュネットは、世界観とも連動していた修辞学的詩学の精神を、ひとたび封印された規範性を、復活させようと目論む<sup>26</sup>。

文学的な“死後の栄光”と科学的な“caduc 性”——“役割を果たしたあとになくなる”という動物学的語義がジュネットの込めたニュアンスに近い——との対比は、ランソンよりさらに手前で、『科学の未来』のルナンの訴えに応答している。この書のルナンは、のちの世代によって“読まれたい”と望むことを、文学的な、すなわち反-科学的で利己的な欲望と見なした<sup>27</sup>。

<sup>24</sup> G. Lanson, *L'université et la société moderne*, p. viii-ix. 本稿註 8 も見よ。本文中で次に登場する「現代の真の人文学」は、この書の最終章のタイトル。アクセスが難しいこの書の最終章の抜粋が、*Contre la rhétorique et les mauvaises humanités* というおそらく編者の手になる題を付されて *Essais de méthode [...]* に収録されており、ここでの議論に係わるランソンの考えは概ね把握できる。

<sup>25</sup> G. Genette, « Le renouveau de la poétique ».

<sup>26</sup> この意図により、ジュネットの科学は透明さのうちにある種の“批評性”を帯びる。

<sup>27</sup> Voir Ernest Renan, *L'avenir de la science*, "GF-Flammarion", 1995, p. 224 et p. 265-267.

人間精神の進歩のためには、無数の個性から抽出された精神を継承しその純度を徐々に高めればよく、テキストの偶有性に拘泥する必要はない……。確かに、ある意味で科学は、「一つの知<sup>サイアンス</sup>が次々とのりこえられていくようなダイナミズム」であり、「のりこえられた知<sup>サイアンス</sup>」の“残滓”が、「テキストとして残る」ことになる<sup>28</sup>。

### Ⅲ. テキストの行方

サント＝ブーヴは「伝記を成すために作品を用いた」が、ランソンは「作品を説明するために伝記を用いる」と明記した。「個人性の定義が文学的分析の到達するべき目的」であるとしても、その個人性は「現実の個人ではなく芸術作品を定義する」べく探索され、問われるのは「作品のうちにある個人性」となる<sup>29</sup>。かくして、ジュネットの言う「作品の心理学」が、以後の研究を呪縛する<sup>30</sup>。構造主義的アプローチでさえ、「閉じられ、完結し、絶対的な《対象》」としての作品の構造を問う限りにおいて、この呪縛のうちにあるという。

ランソンはすでに、「著者から切り離され」、「それ自体で存在する」作品への意識を示した<sup>31</sup>。絶対的な対象と化したかに見えても、“作品の心理学”のうちの作品は、最終的には、作者との関係を筆頭とする安定的な「親子／因果関係<sup>32</sup>」[filiation]に保護されている。文学の科学の提唱とほぼ同時期に浮上したテキストの概念は、この“作品の心理学”を突き崩す。“作品からテキストへ”は、不可逆的な流れではないとしても、以後、作品は、少なからずこの刻印を留める。

文学は、乗り越えられる思想や技術としてではなく、還元不可能と想定されるテキストとしての伝承の形態である。だがそのテキストに被せられる、作品という統一の“殻”は、より高次の科学性を求め、あるいは逆に、疑似科学性への抵抗を目論むとき、妨げとなる。自身の書き物に作品性を求めないという意味で *dés-œuvré* とされるジュネットの“詩学者”は、作品を越

---

ルナンは、匿名的な精神の系譜のみならず、「大きな科学的組織」をもって推進される集団的研究にも言及している (p. 284-285)。

<sup>28</sup> 柄谷行人、「交通について」、『差異としての場所』、講談社学術文庫、1996年所収、14頁。

<sup>29</sup> G. Lanson, *Hommes et livres*, p. viii et p. xiv-xv.

<sup>30</sup> G. Genette, « Le renouveau de la poétique ».

<sup>31</sup> G. Lanson, *Hommes et livres*, p. xii.

<sup>32</sup> R. Barthes, « De l'œuvre au texte » (1971), t. III, p. 913.



える“詩学”の次元を求める限りにおいて作品から距離をとり、“原<sup>アルシ</sup>テク<sup>ス</sup>ネ<sup>スト</sup>”<sup>33</sup>を指向する。一方、バルトにとってのテキストの読み手は、作品の意味の既成性に屈しないがゆえに「所在ない人<sup>34</sup>」[un sujet désœuvré]であり、この不確実さを抱えたまま、科学性の根拠たる言語それ自体を巻き込む“文学的”なテキスト、それ自体が作品となりうるテキストを綴る<sup>35</sup>。

ランソンは「結び目<sup>36</sup>」[*nœuds*]としての作品に就いたが、テキストはその語源の含みから網<sup>ネット</sup>の目に準えられる。影響関係の解明を目指す成立源研究は、結び目のために網の目を想定するが、間<sup>アンデル</sup>テキスト性は、結び目から網の目への開けを重んじる<sup>37</sup>。フェルディナン・ブリュンティエールのジャンルの進化論は、ある意味で、網の目重視のアプローチの極端な形態である<sup>38</sup>。

「作品から精神へ至り精神から作品へ舞い戻る永続的な流れ<sup>39</sup>」を、科学的かつ歴史的に可視化する意志は、ジュネットの原<sup>アルシ</sup>テキスト論に継承される。

過去の個別的な作品から抽出されるジャンル性は、ジュネットにおいて、可能態として未来へさし向けられる<sup>40</sup>。可能態の文学研究は、実証的データの蓄積を不要とするものではないが、ヴァレリーの詩学がそう構想されていたように、「文学史にその導入と意味と目的を与える<sup>41</sup>」という指導的位置に立ち、文学史的探索を下働きの位置に格下げする。ただし、少なくとも「詩学の再興」のジュネットは、“文学史”を養分とし、かつ統括する“詩学”に、それと等価的な“批評”を併置している。互いに歩み寄らず一定の距離を保つ詩学=文学理論と批評が、「その相補性の意識と実践をもって、交流

<sup>33</sup> Voir G. Genette, *Introduction à l'architexte*, Seuil, 1979.

<sup>34</sup> R. Barthes, « De l'œuvre au texte », t. III, p. 911.

<sup>35</sup> 美術史家の手になる次の論考は、対象としての“作品”と区別される、対象と言説を巻き込む“テキスト”の概念を、明瞭に理解させてくれる：「見ることの記号学」、『宮川淳著作集 I』、美術出版社、1980年所収。対象も言葉からなる文学と美術の性格の違いもあろうが、著者の思考の明晰さによるところが多いだろう。

<sup>36</sup> G. Lanson, *Hommes et livres*, p. xiv.

<sup>37</sup> ネット上の議論では、ときに偏執的なほどに“ソース=典拠”の提示が求められる。テキストと注釈の主従関係が希薄化したフラットな場であればこそ、ヒエラルキーや“濃淡”を求める思いは強い。

<sup>38</sup> Voir Ferdinand Brunetière, *L'évolution des genres dans l'histoire de la littérature*, Hachette, 1890.

<sup>39</sup> G. Lanson, *Hommes et livres*, p. xiii. ランソンによる、ブリュンティエールの方法論の要約。

<sup>40</sup> ルナンは、「存在」より「生成」を重んじ、未来を意識していたが、ジュネットの“可能態”はまた意味合いが異なる (voir E. Renan, *L'avenir de la science*, p. 229)。

<sup>41</sup> Paul Valéry, « L'enseignement de la poétique au Collège de France », in *Œuvres*, t. 1, Gallimard, "Pléiade", 1957, p. 1443, cité dans G. Genette, « Le renouveau de la poétique ».

と必要な往還」を行なうことに、「文学研究の未来」があるという。

バルトもこれに応じるかのごとく、ある種の“往還”の場を想定している。一方では、「テキストの理論」に、「一切のメタ言語の批評／批判」、「科学性の言説の再検討」の役割が託される<sup>42</sup>。「〈テキスト〉は社会的な空間」であるがゆえに、「〈テキスト〉に関する言説はそれ自身がテキスト」となるというときのテキストは、科学を牽制する実践的な活動そのものである<sup>43</sup>。だが他方で、批評は反-科学の極に固定されることなく、「テキストの理論が想定する批評的科学 [science critique]」が想定される。この批評的科学は、「テキストの《モデル》は存在しないのだから一般性の […] 科学ではない」が、「テキストは決して固有化 [approprié] されないのだから個別性の […] 科学でもない」という。「著者の（市民として同定される）《個人的な》活動の帰結ではなく、諸々のコードの無限の交通 [intercourse]」に晒されるテキストの属性からして、批評的科学はいずれの極にも定在しない<sup>44</sup>。

結局のところ、時代や集団と通底するランソンの天分や、ブリュンティエールを経て科学化されたチボーデの天分がそうであったように、ジュネットが予見した文学研究の未来、「科学的概念」でありながら「批評的価値」を持つバルトのテキスト概念も<sup>45</sup>、起点としての個とそれを越える次元、文学研究につきまとう“振幅”に立ち向かう構えを示す。

定義上、テキストは還元不可能であり、何かに還元されたとき、テキストはもはやない。ところが、この本性に背くかのように、作品と対置されるテキストの概念は、親子／因果関係や個の“殻”を免れようとする。ただしこの概念の強みは、あらかじめテキストがある限りで発揮される。バルト／クリステヴァ的なテキスト概念が練られる以前、テキストは“本文”でしかなかった。本文は、周囲に展開される広義の注釈的文章との対比によって本文である。本文の重みは注釈をなす共同体に発し、本文の画定可能性——たとえ相対的であれ——は、作品の神話的求心性に発する。たとえば“統合

<sup>42</sup> R. Barthes, « Texte (théorie du) » (1973), t. IV, p. 447.

<sup>43</sup> Idem, « De l'œuvre au texte », t. III, p. 915-916.

<sup>44</sup> Idem, « Texte (théorie du) », t. IV, p. 458. II節冒頭で言及した文脈でバルトは、文学の科学と文学批評の「ふたつの言説は決して混同されるべきではない」とも記している (« Critique et vérité », t. II, p. 787)。

ある時期のバルトは、個を越える次元に就く文学史を夢想した (voir *Sur Racine*, t. II, p. 184-185 et p. 193-194)。詩学≒科学と文学史の関係についての考えは、ジュネットと異なると言える。

<sup>45</sup> Idem, « Texte (théorie du) », t. IV, p. 453.

テキスト科学<sup>46</sup>”といった文学外への展開をもって科学化されたとき、作品の神話およびこの神話が生む共同体も希薄化し、よって本文と非-本文の区別は失われ、同時にテキスト概念本来の力も失われる。テキストは、「〈テキスト〉の想像的な尻尾<sup>47</sup>」としての作品、および作品から想像的に透視される作者の像が、魅惑を及ぼす圏域内でこそ実践的な力を持つ<sup>48</sup>。

#### IV. 文学の擬態

科学をもってテキストを消去する意図を持つわけではないが、『未読の書についていかに語るか』と題されたピエール・バヤールの書は、ルナンの系譜上で理解されるべき内容を持つ<sup>49</sup>。斜に構えたスタイルをとりながらも、

<sup>46</sup> 次を参照：松澤和宏、「機械論的パラダイムから解釈学的パラダイムへ：〈統合テキスト科学の構築〉のための覚書」、*SITES : Journal of studies for the integrated text science*, vol. 3, n° 2 所収。

<sup>47</sup> R. Barthes, « De l'œuvre au texte », t. III, p. 909.

<sup>48</sup> テキスト概念は、作品を軸に展開されたシークエンスの歴史性を踏まえて提出された実践的概念であり、佐々木健一が作品概念と比較検討する際に想定するような美学的概念ではない（『作品の哲学』、東京大学出版会、1985年、54-63頁参照）。

こうした問題を扱う以上、加藤典洋の『テキストから遠く離れて』（講談社、2004年）にも言及しておくべきだろう。ここ30年間の「テキスト論批評の席卷」による「停滞」（20頁）を告発する、その旗幟鮮明たる“意図”にも係わらず（あるいはその意図ゆえに）、この書の力強さと面白さは、まさしく、テキスト論が涵養してきた“振幅”に発している。端からテキストと無縁の場に身を置くのではなく、テキストから“遠く離れる”身振りをもって、この書は成立している。

たしかに、加藤が議論の起点としている、大江健三郎の小説への対応が露顕させる、テキスト論の席卷の残存効果のうちには、反省されるべき無自覚さがあることだろう。だが、テキスト論は元来、作品から“遠く離れる”身振りとして、振幅の実践的営為としてあった。

たとえば、II節冒頭で見たように、文学批評を、「作品に特定の意味を与える意図を自らのリスクにおいて公然と引き受ける言説」とするバルトは、“テキストから遠く離れる”身振りもあらかじめ想定していたことになる。あるいは、40年以上まえに開催されたメルクマールのコロック『現代批評の道』に報告される、テキスト論の原点にある生々しい問題意識を受けとめてみれば、“遠く離れる”身振りのためにテキスト論を一方の極へ固定することの不当さが理解されよう。なかでも、セルジュ・ドゥブロフスキーの「批評と実存」は、新批評をテキストの側へ駆り立てたひとつの原動力が、作者の“実存”と直接に係わるものであったことを示している（Serge Doubrovsky, « Critique et existence », in *Les chemins actuels de la critique*, Plon, 1967）。

なお、国文学の分野でずいぶん以前になされた論争の一環をなす、谷沢永一の「方法論的批評とはなにか」（『文學界』、1977年8月）は、実証と論証、方法論と方法の隔たりについて考察し、“振幅”について考えさせる。

<sup>49</sup> Pierre Bayard, *Comment parler des livres que l'on n'a pas lus ?*, Minuit, 2007.

真に有益な教養のあり方を探り、個人の創造的能動性を重んじ、それらに利するべく読書の神話を解体するこの書は、テキストなるものを、後景へと追いやる。訴えそのものはきわめて真面目であり、かつ時代に即してもいるこの書により私たちは、抽出と整理の成果であるテキストをもって学ぶ健全さから逸脱して、テキストや作品といった、偶有的な疑似実体に拘泥することの、現代における不真面目さを知らされる。疑似実体への密着を反-時代性の価値に見立てるポーズは、いまやシニカルに映り過ぎる。

読まないことの効用ではなく読むことの悦楽を説いたエミール・ファゲは、「思考するのに書を読む必要のない人間は幸福なのかもしれない」と漏らしていた。逆に「不幸」なのは、「読みながら、まさしく著者が考えることのみを思考する者」である<sup>50</sup>。ジュネットに先立ち、ロマン主義以後の文脈で“詩学”に立ち向かったヴァレリーは、“思考するのに書を読む必要のない”人間の典型であり<sup>51</sup>、その詩学は、反-文学的な意志に駆動されていた。文学の条件への反撥を示しつつ文学と係わった事例は珍しくないが、ヴァレリーは、文学という“地”に拠って反-文学の文学を刻む擬態の徹底によって際立っている。

ヴァレリーは、文学の多くの頁を、「私は文学の頁である」という以外の意味を持たないものと考えていた。逆にヴァレリーはしばしば、「私はもはや文学と何の係わりも持たず、ここに記すことがその更なる証拠である」と、暗にではあるが執拗に断言する<sup>52</sup>。

ヴァレリーの詩学を論じつつ自身の立ち位置を測るこの論考を、ジュネットは「文学それ自体」と題している。確かに、ヴァレリーが残した、可能態としての精神の信仰と偶有性としての文学の嫌忌の痕跡が、なぜ文学でありうるのかと問う愚鈍さのうちにこそ、文学それ自体の思考が始動する。

科学とは畢竟、共同体の問題に他ならない。ブリュンティエールは、示唆的なタイトルを持つ書で、「主観主義」を、「科学のみならず社会それ自体の否定」として糾弾した。科学も社会も「信仰の共同性」[communauté des

<sup>50</sup> Émile Faguet, *L'art de lire* (1912), Hachette, 1923, p. 160-161.

<sup>51</sup> 「すべての書物は私には偽りと思える」(P. Valéry, *Cahiers*, CNRS, 1957-61, t. IV, p. 452)。

<sup>52</sup> G. Genette, « La littérature comme telle », in *Figures I*, Seuil, "Points", 1976, p. 254. ヴァレリーと文学の逆説的關係の諸相について：Michel Jarrety, *Valéry devant la littérature : mesure de la limite*, Presses universitaires de France, 1991.

croyances] に依拠するとすれば、当然の主張ではある<sup>53</sup>。ブリュンティエールにとっての科学は、オーギュスト・コントの“実証主義”をモデルとして構想された。地道な辞書編纂者エミール・リトレは狭義の実証主義者でもあったが、広義の実証主義者ランソンに至ると、コント的な理念はほぼ失われる。実証性と共同体の運動、さらには共起という、肝心の一点を除いて。

“信仰の共同性”を失った人間の活動である文学の作品は、反-共同体的な「書物の島」として回流する<sup>54</sup>。だが、その文学を“学”として追うとき、作者という個の還元不可能性が、作家研究の共同体という不自由な殻を生む。共同体のための実証研究において、文学（研究）の意味や価値は、作家や作品を論じる行為それ自体のうちで、あらかじめ保障される。ひとたび共同体が成れば、一切の“価値”の問いや、“文学それ自体”への問題意識は消える。個の還元不可能性という、文学の条件そのものに守られるこの回路には、出口がない<sup>55</sup>。

<sup>53</sup> F. Brunetière, *Sur les chemins de la croyance : première étape. L'utilisation du positivisme*, Perrin, 1904, p. 13.

<sup>54</sup> 引用は、ジャック・ランシエールによるバルザックの『村の司祭』論からの借用 (Jacques Rancière, « Balzac et l'île du livre », in *La chair des mots : politiques de l'écriture*, Galilée, 1998)。

「落伍者 [déclassés] の顧客によって支えられる文学。私たちは社会的な亡命者であり、私たちの乏しい荷物 [bagage] のうちに、文学を持ち運ぶ」 (R. Barthes, *La préparation du roman, I et II*, Seuil : IMEC, 2003, p. 365)。

<sup>55</sup> 「科学の固有性は決して完遂されないことにある」 (F. Brunetière, *Sur les chemins de la croyance*, p. 181) とすれば、文学研究の科学的共同体も安泰である。実証主義の圏域において元来、「意見は自由ではない」が (*ibid.*, p. 12)、作家研究の共同体は、作家への“愛”の共同体であるため、いつそう甘んじて不自由を受け入れる。

文学では「夏目漱石をやる」などと言うが、物理では「湯川秀樹をやる」とは言わない (西垣通他、『電脳汎智学』、図書新聞、1994年、42-43頁を見よ)。西垣はこの文脈で、「理科系の学問というのは無人称」という常識を疑っているのだが、逆に、文学研究者が人称的に専門を規定する常識も疑われてしかるべきである。問われるべきは、特定の作家に多くの時間を割くことではなく、作家名をもって自己を規定する身振りの反復のうちで、文学の“価値”に係わる問いに眼を閉ざすことである。閉じられた愛の共同体の並列として成る文学研究の地図には、濃淡や方向づけがない。価値の問いは、“文学そのもの”と同時に、作家・作品・研究テーマの“序列”にも係わる。

たとえばランソンは、作家の身分を根拠づける主要作品と、周辺情報を与える文章の区別が、文学史の「方法上の重要な問い」であるとの常識的な指針を示している (G. Lanson, *Hommes et livres*, p. v-ix; 引用は vi 頁)。逆にルナンは、作品の“文学的”価値に囚われず、「最も中心から外れ [excentriques]、我々の考えに則して判断すれば最も価値の少ない文学」が「最も重要」でありうると記す。表層の奥に「普遍的な力」を、人間精神の“流れ”を見ることを重んじるからである (E. Renan, *L'avenir de la science*, p. 244-245)。「批評はしばしばその対象より重要である」 (p. 256) とするルナンの考えは、ブリュンティエールに引き継がれる (ブリュンティエールの

極言するなら、すべての文学は、“私は文学である”という擬態と、“私は文学と無縁である”という擬態のあいだにしかない。テキストに就くという選択の根拠や無根拠を正視し、擬態としての文学的営為と偶有性としてのテキストの今日的価値を思考するには、還元不可能性の想定を方法的に排し、共同体に一個の石をもたらず従順さをも捨てるという擬態から始める他ない。

バルトの“批評的科学”の根底には、「最も取るに足らない知が突如体系的なものとなすのを受け入れる」と同時に、「最も慎重な批評家もが十全に主観的かつ歴史的な存在としての自分を開示する」という振幅があった<sup>56</sup>。柄谷行人が“科学のダイナミズム”について語っていたのは、小林秀雄が、「本質的に科学を恐れている」一方で「偶然性を恐怖している」と断じ、この事由をもって「彼の作品はテキストたりえない」と結論づける、独断的かつ文学的な文脈においてである<sup>57</sup>。柄谷自身は、科学と偶然性のいずれをも恐れない意志をもって、後世に“読まれるテキスト”を成そうとする。こうした俗気を嫌う文学研究にも、交通の偶然性に身を開くと同時に広義の科学性を求める擬態が、いくばくか求められている<sup>58</sup>。

---

“凡一批評主義”については、註4に示した拙稿で扱った）。

価値との係わりがより明確な他のディシプリンでは、あるテーマやある学者を扱うことに対し、現代的価値を持つか否かといった議論が正当になされうる。価値の問いを正視しない文学研究では、個の還元不可能性の名のもと、いかなるテーマでも黙視される。

この平坦さに甘んじずに濃淡や流れを模索するとしても、そうした作業は、読む喜びという文学の拠り所を損ないかねない。制度的には大作家のバンテオンは概ね確立されているが、面白さは読み手個人が見いだす他なく、この自由を尊重するがぎり、流行や人気に留まらない濃淡や流れは示しがたい。そもそも、設定されたテーマのために面白みのないテキストと向き合うことは必要ではあっても、仮にそうした作業が全面を覆い尽くしたなら、それでもなお文学研究でありうるのか定かではない。読む喜びを犠牲にしてでも取りくむべき課題を、はたして文学研究は持つのかと問うことが、第一の課題であるかもしれない。

<sup>56</sup> R. Barthes, *Sur Racine*, t. II, p. 194.

<sup>57</sup> 柄谷行人、「交通について」、14頁、16頁。本稿のⅡ節末尾を見よ。

<sup>58</sup> ブリュンティエールにとり、文学の科学とは、文学を文学史に帰着させる作業とほぼ同値であった。だが、こうした営為の残滓はときに無残であり、ブリュンティエールの書き物はもはや、冷やかな一瞥以上の反応を惹起しない。だが、文学が文学史へ還元されることの夢想は、このうえなく甘美なものでありうる。この甘美さを受けないことを、文学への忠誠ととるべきではない。“文学を意識しない人々の文学を批判するためにこそ文学が必要である”といった類の一時期の柄谷の発言は、この甘美さに係わるものであっただろう。